

# ARCSモデルからARCS-Vモデルへの拡張 On Expansion of ARCS Model to ARCS-V Model

鈴木 克明  
Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院教授システム学専攻  
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University  
Email: ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：ARCSモデルがARCS-Vモデルとして拡張され、動機づけ設計の第一原理としてまとめられた。ケラーの近著（Keller, 2010）では、その背景となるマクロモデルに大幅な修正が加わり、新たに、意欲（M）と意志（V）にパフォーマンス（P）を加えてMVPマクロモデルとなったことが示された。一方で、ARCSモデルに見られるような方略集が、新たに加えられた意志に用意されているわけではなく、また、学習意欲のデザインに関するシステムのプロセスモデルに変化は見られない。

キーワード：ARCSモデル, ARCS-Vモデル, 意欲, 意志, 第一原理, MVPマクロモデル

## 1. はじめに

インストラクショナルデザイン（ID）モデルの中で、「魅力」を直接的に扱うものとして最も広く知られているものにジョン・ケラーが提唱するARCSモデルがある（鈴木 1995）。1983年に提唱され、1987年に我が国に紹介されてから、幅広い研究者によって様々な研究が行われ、また数多くの教育実践において学習意欲を高める枠組みとして採用されてきた（Suzuki, et al, 2010）。本稿では、2010年に刊行された提唱者自身による初めての単著（Keller, 2010）を丹念に読み解き、それを翻訳（ケラー 2010）する中で明らかになったARCSモデルの拡張について報告する。

## 2. ARCS-Vモデルへ

ARCS-Vモデルは、1983年のモデル提唱以来、比較的安定していた枠組みに新たに意志（Volition）を加えた拡張の結果提唱されるようになった拡張版動機づけモデルである。この拡張についての最初の提案は、提唱者自身によって、2004年に我が国で開催された国際会議の招待講演の中で公表された（Keller, 2004）。のちにケラーがメリルのIDの第一原理（Merrill, 2002）になぞらえて「学習意欲デザインの第一原理」を発

表した際（Keller, 2008）に、ARCSの4原理に第5番目の原理として加えられている（表1）。

意志（Volition）は、「目標を達成するために努力し続けることに関連する行動と態度全般を示す概念」と定義されている。自己制御力と同意語であると捉えられている。一方の意欲

（Motivation）は「人々が何を望み、何を選んで行い、そして何を行うことに全力を傾けるかを一般的に意味する」と定義されており、「我々がやっていることをなぜやっているのか」という人類の最大の関心事を説明しようと試みることとしている。意欲が高い場合はその実行を妨害する状況への抵抗力が強い一方で、当初の意欲がそれほど高くない場合、妨害に打ち克つために意志の力が必要だとされる。Kellerによれば、初期の動機づけが強力であれば意思を支援する方略は最小限でよいかもしれないが、実行時にはあらゆる障害や相反する目的が待ち受けているのでやり続けるための自律的方略が求められることになる（鈴木 2009）。

ARCSモデルには、4要因とその下位分類に基づく動機づけ方略・方策の提案のほかにも、学習意欲のデザインプロセスがある。これは、「すでに学習意欲が高い学習者には動機づけは不要であり、必要な側面だけを補強することが肝要」との視点から、動機づけ方略を盛り込みすぎないことを目的にしたプロセスの提案と言っても良いものである。より詳細なプロセスとしては10段階モデル（ケラー 2010、第10章）が提唱されている一方で、宮城県仙台第一中学校での実践の中から生まれて他の国の実践でもその有効性が確認された「簡略版」（ケラー 2010、第11章）もある。ARCSモデルに意志（V）が加わった一方で、意志についての方略・方策がまとめて示されたわけでもなく、また、これらのデザインプロセスには特に変更が加えられてはいない。

表1：学習意欲デザインの第一原理

1. 学習への意欲は、学習者の好奇心が現在の知識の中のギャップを知覚して刺激されたとき、増進される。
2. 学習への意欲は、学ぶべき知識がその人のゴールに有意義に関連があると気づいたとき、増進される。
3. 学習への意欲は、学習者が学習課題をマスターすることに成功できると思うとき増進される。
4. 学習への意欲は、学習者が学習課題に満足な結果を予想し経験するとき、増進される。
5. 学習への意欲は、学習者が彼らの意図を保護するために意志（自己調整）の方略を使うとき、増進され、かつ、維持される。

注：Keller, 2008；ケラー（2010）第1章における訳出

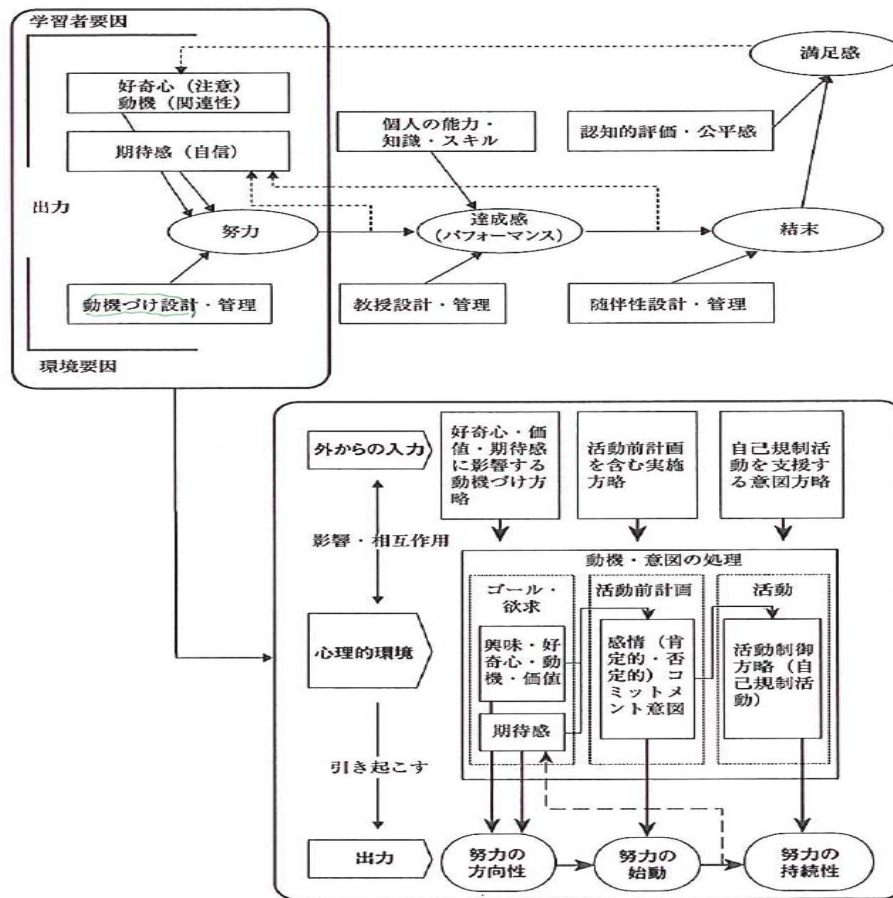


図1 : MVP マクロモデル (注 : ケラー 2010, p. 11) の図 1.3 を再掲)

### 3. ARCS-V を支える MVP マクロモデル

デザインプロセスについては拡張がなされていない一方で、ARCS モデルを支えるマクロモデル (鈴木 1995) には、大幅な拡張が提案されている。意欲 (M) と意志 (V) にパフォーマンス (P) を加えて、MVP モデルと命名されている。図 1 にその概要を示す。

### 4. おわりに

本稿では、ARCS モデルの拡張としての ARCS-V モデル及びそれを支える枠組みとしての MVP マクロモデルを紹介した。意欲を補う実行時のかなめとして意志に注目し、それを含むための拡張が行われた背景には、自己制御力に関する研究があることが分かった。この拡張については、提唱者の近著 (ケラー 2010) にその紹介がある一方で、意志を高めるためにはどのような方略を採用するのが良いか、また、学習意欲のデザインプロセスに意志の側面をどのように組み込んでいったら良いのかなどの詳細は述べられていない。今後の課題として、ARCS モデルに含まれている動機づけ方略や方策、ならびに設計プロセスの詳細なノウハウに匹敵するような作り込みが待たれるところである。

### 謝辞

本研究は、平成 22-24 年度文科省科研費 (挑戦的萌芽研究 : 課題番号 22650206) の補助を受けている。

### 参考文献

- (1) Keller, J. M. (2004). A predictive model of motivation, volition, and multimedia learning. An invited keynote speech at ICoME 2004 (*Proceedings*, 9-20).
- (2) Keller, J. M. (2008). First principles of motivation to learn and e<sup>3</sup>-learning. *Distance Education*, 29(2), 175-185.
- (3) Keller, J. M. (2010). *Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach*. Springer.
- (4) ジョン・ケラー著 (2010) 鈴木克明 (監訳) 「学習意欲をデザインする : ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン」北大路書房
- (5) 鈴木克明 (1995) 『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて—ARCS 動機づけモデルを中心に—. *教育メディア研究*, 1(1) : 50 - 61
- (6) 鈴木克明 (2009) 「学びたさ」の設計を支える研究の動向 第 16 回日本教育メディア学会年次大会発表論文集 : 119-120.
- (7) Suzuki, K., Nemoto, J., & Goda, Y. (2010). Research Trends related to Keller's ARCS Model: A Review of Literature in Japan. *A paper accepted for presentation at ICoME 2010*.